
侍と行人のながされて藍蘭島

紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

侍と行人のながされて藍蘭島

【コード】

N5315P

【作者名】

紅

【あらすじ】

タイトル通り、ながされて藍蘭島の二次創作です。

第一話 ながされて藍蘭島 (初) (前書き)

ほのぼの(?)系を書いてみたくなったため、書いてしまいました。

更新スピードがばらばらになる可能性があります、楽しんでいただければ幸いです。

第一話 ながされて藍蘭島 (初)

「いや」。行人殿もこの船に乗っていたとは奇遇でござるな」
「ホント、こつちもビツクリだよ。まさか、ハルがこの船に乗っているなんてね」

二人の少年が船の手すりに手を置きながら会話をしていた。

一人の少年の名前は上沢晴人^{かみざわ はると}。青色の髪は少し長めで、服装は剣道着と言った今の時代からすればおかしな格好をしている上に、腰には木刀が提げられていて、その姿は昔の侍みたいだ。

もう一人の少年の名前は東方院行人^{とうほういん いくと}。黒髪で何処にでもいそうな少年である。

「それにしても、行人殿は何故ここに居るのでござるか？」

「うーん。家出、かな？」

「家出でござるか」

「まあね。それより、ハルはどうして？」

「拙者は強者探しの旅をしにでござるかな？」ニシシと笑みを浮かべ、「拙者としては行人殿とも一度、手合わせ願いたいでござるが」勘弁してくださいと行人は言いながら、空を見上げる。それに釣られるようにして晴人も空を見上げる。

澄み渡った空。雲は綿菓子^{わたがし}がちぎれたように散らばっているだけの、快晴だ。そんな快晴な空が少しすると変貌^{へんぼう}する。

「わー！ー！ー！！」

二人の少年は荒々しい海に体を投げ出されていた。今は浮き輪があるからいい物の浮き輪が無くなれば、一瞬で二人の体は海に呑み込まれるだろう。

行人は必死にもがきながら訊ねる。

「ちよ、何でこんな事に！？ さっきまであんなに晴れて……」

「いや、拙者に言われても困るでござるよ！」

晴人も必死にもがきながら返事を返す。

「ハル！ 上沢流の技でなんとかならないのか！？」

「む、無茶を言うでござるな！ この状態でどうやって技を使えと言うでござるか！？ それよりも、東方院流の技で……」

「ボクの家系は技なんて使えないって！」

そう、二人は共に剣術が使える。そして、晴人の家系には代々伝わる上沢流と言う流派があり、様々な技が使えるのだ。

ギヤーギヤーと二人が騒いでいると、ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴと大きな音が聞こえて来た。

二人はん？ と後ろに振り返る。そこには、巨大な津波が出来上がっており、

だっばあああん……と二人の体は一瞬にして海に呑み込まれた。

「せーのーのーのー」

「それっ？」

青みがかかった黒目にとび色のストレートロングヘアの髪が藍色の大きいリボンでポニーテールに綺麗にまとめられた少女は釣竿を勢いよく振り下ろした。

しゅるるると音を立てながら釣り糸は飛び、ぽちゃっと水の中に落ちる。

「待っててねーとんかつ。今おいっしいごちそう釣ったげるね？」

少女は隣に居るおかしな生物に声をかける。とんかつと言うことは、豚だろう（ただ単におかしな名前を付けるのが楽しいだけで、豚ではないかもしれないが）。だが、その生物を普通の人が見たら、豚と分かる人は少ないはずだ。丸に目と耳と鼻と小さい尻尾（？）が付いているだけなのだから。

「ゆうべは嵐だったからね。きつとすごいのが……」
瞬間、ググツと釣竿が何かに引っ張られる。

「やった!!! さっそくあたりイ!!!」

少女は勢い良く釣竿を引っ張る。

ざばあと姿を現したのは、東方院行人だった。そして、行人の足にしがみついている上沢晴人も徐々に海中から姿を現す。

「わっわっ大変っヒトが釣れちゃったよぉ〜〜〜」キョロキョロと辺りを見回しながら、「ど、ど、どぉーしよぉ〜」

ピクツと晴人の眉が動き、

「た、助かったでござるか!？」

ガバアと起き上がる。少女は驚いたのが、数歩後ろに下がっていた。

そんな少女が見えていないのか、

「むっ! 強者が居るような気がするでござるよ。これは、早速手合わせ願わねば!」

そんな事を言い、何処かへと走り去ってしまう。

「……はっ!」

しばらく思考を停止させていた少女が何かを思い出したかのように動き出す。

「」

「なんだ? 何かが聞こえる気がする。一体誰が何を言っているのだろうか? などと思いつながら、うつすらと行人は目を開ける。

目の前には一人の少女が映し出された。

「」

(……………)

「っかり!」

(? 誰だ…?)

行人の停止していた思考が少しだけ回復する。

(確か ボクは大波に飲まれて……)

「ん……」

(あ……どーやら助かつ……)

スパアアン！！ と言う音と共に頬に鋭い痛みが走る。

どうやら、まだ気絶していると思った少女が勢いよく頬を引つ叩いたようだ。

ホラ、キミすっかりして！！ と言う声が聞こえてからも数回同じ事が繰り返させられ、

「死んじゃダメだよー！ー！！」

ズドン！ ズドン！ と今度は違う部分に痛みが走る。

もう、何が何だか分からないんだけど。これ以上、何かされたら、マジで地獄へ直行だ…… と思いつつも必死に行人が目を開けると、唇に柔らかい感触が生まれ、少女の顔が目の前にあつた。

(ななななな！？ 地獄どころか…これは天国！？)

瞬間、腹が一気に膨れ上がる。

どうやら少女は人工呼吸をしたかつたようだが、見事に失敗に終わったのだった。

少女は布団で寝ている行人を見ながら心配そうに尋ねる。

「どう？ 長老^{オババ}」

「うむ。もう大丈夫じゃろ」呆れるよう、怒るように少女を睨み、

「まったく。助けるつもりでドドメさしてどーする！？ ちゃんと教えただろうが！」

ペロと可愛らしく舌を出し、

「いやー。しっぱい、しっぱい……」

「それにしても、なんかみんな集まっちゃったねー」

「まあ。ムリもない……仕事サボりおつて」

「この島に“外”の人間が来たのは初めてじゃからのう」

「そだね」

少女は行人の体をぺちぺちと叩きながら、

「それにしてもこのコ、体つきウチらとずいぶん違うよね　　な
んでカナ？」

「それはのうすず。こやつは……」一拍置き、「男、なんじゃよ」

「……男オ!？」

いつの間にか家の中に入り込んでいた大勢の少女の音が響き渡る。

一人の少女が行人を長老の家に運んでいる時、一人の少年はと言
うと、

「腹減ったでござる。良く良く考えれば、一週間飲まず食わずで
ござった」

うーと唸りながら、道端で倒れていた。

ぐうぐうと言う音が、響き渡る。

「……何か入っていたでござろうか？」

がさごそと持っていた大きめのリュックを漁り始める。

旅に出る用意をしていた晴人のリュックには当たり前のように色
々な物が入っていた。っが、肝心の食べ物や飲み物は入っていなか
った。

「このままでは、強者と戦う前に飢え死にするでござるよ」

「あなた、こんな所に倒れてたら邪魔になりますわよ?」

不意に声が掛けられた。

晴人は首だけを上げ、声をかけてきた人物を見る。

声をかけてきたのは女子だった。癖のあるロングヘアを白いリボ
ンでツインテールにしている、結んだりボンをぴんと立てている。

そして、服装は巫女が着るような……というか、巫女服そのままの
だが、今の晴人はそんな事を確認するほど余裕がなく、

第一話 ながされて藍蘭島 (初) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました

第一話 ながされて藍蘭島 (終)

「立派な神社でござるな」

少女に付いて行くように長い長い階段を上った先には立派な神社が在り、晴人の口からは自然とその言葉が出ていた。

「空腹で倒れてたわりには案外疲れてないのね」

「ん？ 拙者、日頃から鍛練はしつかりとこなしていた故、これぐらいは余裕でござるよ」

へえ〜と感心しながら少女は神社の中に消えていく。少女を追うようにして、晴人も神社の中へ入る。

「はい、今はこんなものしかないけど食べていいわよ」

コトツと目の前に豆大福が置かれる。

「か、かたじけないでござる！！」

バクバクと豆大福は晴人の体内へと消えていく。

「ねえ、あなた」

「はんへほさるは？」

「……呑み込んでから返事をしてくれるかしら？」

ゴクンと豆大福を飲み込み、

「なんでござるか？」

「あなた、見ない顔よね？」

晴人は首を傾げ、

「ここって何処でござるか？」

質問を質問で返した。

「ん？ ここが何処か知らないって事は外の人ってこと？」

(外？ 外とは日本の事でござるかな？)

「外とは日本の事でござるか？」

「うん。まあ、そうね。それで合っているわ」

ほうほうと頷く晴人を横目で確認し、

「っで、ここが何処かって言うとな、島よ。藍蘭島と言う名の、島

なのよ」

藍蘭島？ 始めて聞く名でござるな。そんな島本当にあるのでござるか？ いや、今こうして拙者が居るのだから、本当にあるのでござろう。いやいや、でも実際にあるのならば、名が取り上げられてはいるはずでござる。もう、何が何だか分からないでござる！！と色々な疑問が晴人の頭の中を飛び交う。

そんな晴人に気付いたのか、気付いていないのか、少女が言葉を続ける。

「そう言えば、あなた名前はなんて言うのかしら？」

「ん？ そうでござるな。名前が分からんと呼びづらいでござるからな。拙者の名は上沢晴人でござる。お主は？」

「私の名前はあやねよ」

（あやね？ 名前でござろうが、苗字はないのでござろうか？ いや、もしかしたら特別な事情があるのかもしれんな。どんな事情があれば苗字を明かせないのか拙者は知らんのだが。まあ、相手が名乗らんのなら、無理に聞き出す事もないでござろう）

「あやね殿でござるな。分かったでござる」

そう言つと晴人は再び豆大福を口に運びだす。

あやねは豆大福を食べ進める晴人を見ながら、

「ホント、相当空腹だったみたいね」

「なんへ」口の中にあつた豆大福を飲み込み、「なんせ、一週間飲まず食わずでござつたからな」

ふん。とあやねは適当に相槌を打ち、それよりもと言葉を紡ぐ。

「さつきから思ってたんだけど、あなたと私って何か違うくない？

顔つきって言うか、雰囲気って言うか……」

何を言っているでござるか？ と顔を傾げ、口を開く。

「それは、拙者は男で、あやね殿は女なのだから当然でござろう？」

言つと、晴人は最後の豆大福を口の中に放り込むのだが、

「お、男！？」

突然のあやねの叫びに驚き、豆大福を詰まらせてしまう。

「ツウ、ウグツ！ ゲホツゲホツ」

「だ、大丈夫でして？」

あやねは言いながら晴人に近くに近付き、背中を優しく叩く。

「も、もう、大丈夫でござる」

「そう？」

あやねが離れた事を確認した晴人は疑問に思った事を口に出す。

「何故あやね殿は驚いたでござるか？」

「い、いや、別に何でもないわよ。ホント、何でもないので……ふふふ」

「？」

あやねの言葉に疑問を抱く晴人なのだが、

「それでは拙者、失礼させてもらうでござる。豆大福美味しかったでござるよ」

「ちよ、待ちなさい！」

立ち去ろうとした晴人の前にあやねが飛び出し、制止する。

「何でござるか？ 拙者は強者つわものを探しに行くのでござるのだが……」

「強者を探しに？ 強者が見つければいいってこと？」

「うーんと唸り、顎に手を当てながら晴人は考え、言葉を紡ぐ。

「まあ、そうでござるが。強者がすぐ見つかるとは思えないでござるよ」

「いや、私のすぐ近くに居るわよ。恐ろしいほど強い人物が……」

あやねの言葉に晴人の眉がピクリと動く。

「真まことでござるか？！」

「え、ええ。だから、もう少しここで待っていてくれないかしら？」

「承知いたしました……」

晴人は言うと同時に置いてあったリュックを持ってあやねの横をすりぬけ、外に出る。

「……それでは、ごめん！」

「ちよ、ちよっと、話の流れからして待つのが普通でしょ！？」

「あやね殿から不穏な空気が漂っているでござる！ だから、逃げ

るのでござるよ！」

(つつか、めんどくせえな。なんで俺がこんな目に遭ってるわけ?)
そんな事を思いながら走っていると、

「ん?」

いつの間にか海岸に来ていた事に晴人は気付いた。

「ふ〜。逃げ切れたでござるかな……って、ん?」

と、またまたそこで気付く。少し遠くに三人の人物が居る事に。

そして、その中に行人いが居る事に。

「行人殿〜。何をしてるでござるか?」

ん? と三人が晴人に振り返り、そのうちの一人がニヤツと口元を釣り上げる。晴人は口を釣り上げたのは分かったが、何で釣り上げているのか全く分からないでいた。

「行人殿。その小舟は何でござるか?」

「ん? ああ。この島から出ようと思ってるね。ハルはどうする?」

「そうでござるな。それでは、拙者もお供させてもらつでござるよ……ここでは、無理だと思つからな」

「そう。それじゃ、行こうか」

二人は小舟に乗り込む。

「それじゃ、ハル。頼むよ」

「承知したでござる」

晴人はそう言うつと木刀を握り、構えを取る。

「上沢流、一の太刀迅風!」

叫びながら木刀を斜めに振り抜く。すると、木刀から疾風が吹き荒れ、小舟は風に押されるようにして前に勢い良く進む。

「さよーならー!!! って、うわー!!」

行人が海岸に居る二人に手を振ろうとした瞬間、小舟が大渦に飲み込まれた。

「ギイヤアアアアツ!!!」

二人の少年の叫びが島全体に響き渡つたところで、小舟は大渦に吹き飛ばされた。

「「ただいま(でござる)」」

晴人は自力で立ち上がり、行人は一人の少女に起こしてもらった。
長老は二人に近付き、

「わかったじゃろ？ 自力でこの島から出ようとしても絶対に無理なんじゃよ」

絶対に無理。という言葉にピクと行人の眉が動く。

「絶対!？」

あゝ。言ってしまったでござる。と晴人は肩をすくめた。

「もっかいやる!!」

行人は小舟に乗り、櫂^{かい}でばしゃばしゃと進んで行き、再び大渦に飲み込まれ、吹っ飛ばす。

それを後、四回ほど続ける。

「ねー行人。もう、やめた方がいいんじゃない?」

少女が止めるように訴えるが、

「いや。まだ、全然へーきさ?」

「バカでござるな」

「誰がバカだ!？」

「行人殿でござるよ。これ以上やったら、死ぬ可能性もあるでござるよ?」

フッフッフと行人は笑い、

「ボクが今までただぶつとばされてただけに見えるかい?」

「うん」

少女がすぐに頷く。

行人はビシイと海を指差す。

「実はちゃんと渦のパターンを身体で覚えてたんだよ!!」

「ばたーん?」

「すでに渦^{やっ}は見切った!! 勝負!!」

叫びながら行人は海に出る。

やれやれと言った感じで晴人は肩をすくめる。

少女は少女で行き成り叫び、行人の後を追った。

はあととなり居た長老はため息を吐き、晴人の事を見る。

「そう言えば、お主の名前を聞いておらんかったの」

「拙者の名前でござるか？ 拙者は上沢晴人でござる」

晴人はそう名乗ると、海へと視線を移す。

行人はでっかいシヤチに乗り、空を見上げていた……かと思うと、少女の格好を見るなり鼻血を出し始めた。

踵を返し、この場から立ち去ろうとした晴人は、

「お主はどうするのじゃ？」

不意に声をかけられた。

「ん？ どうするって、何がでござるか？」

「住む場所じゃよ。住む場所。向こうの婿殿むこどのはずすの家に厄介になるようじゃが」

「住む場所、でござるか？ 適当に見つけるでござるよ。見つからなくても、野宿すればいい事でござるし」

長老は口に手を持って行き、シシシシシと不気味に笑うと、
「住む場所は、勝手によつてくると思うがの〜」

「ん？ それって、どういうこ」

晴人が言葉を言い終わる前に、ガシツと誰かが少年の腕を掴んだ。
ギギギギと掴んでいる人物を見る。

「あやね、殿？」

そう、あやねだ。ぜえぜえと息を切らしているところを見ると、
必死に晴人の事を追い掛けてきた事が分かる。

「や、やつと捕まえたわよ。あなた、足速すぎよ……ぜえぜえ」

「そんなこと言われても困るでござる」

二人のやり取りを見てか、長老がぼそりと呟く。

「これなら、問題なからう」

「ちよつと待つでござる！ 流れからして拙者にあやね殿の家に厄介になれと言っているんでござるうが、絶対にお断りでござる！」

長老は首を傾げ、不思議そうに尋ねる。

「なんでじゃ？ 何か問題がある？」

「問題大アリでござるよ！！ どう考えても、あやね殿は何か企んでいるでござる！！ ハッキリ言って、お断りでござる！！ これなら、野宿の方がマシでござる！！」

あやねは拗ねたように言う。

「酷い言いようね」

「誰でも同じ反応するでござるよ！！」

晴人が叫ぶと、タイミングを見計らったように行人が戻ってくる。

「ハル、どうしたの？」

「ん？ ハル？」

と、今になってようやく一緒に戻ってきた少女は疑問を抱く。

「ねえ、行人。この人って、行人と一緒に流れ着いた人だよな？」

「ん？ ああ。自己紹介していないんだっけ」

行人は少女に手を向けながら、

「ハル。この女の子はすずって言って、今日からお世話になる家の人だよ」

「そうでござるか。拙者の名前は上沢晴人でござる」

「あ、はい」

と返事をしたすずは行人にだけ聞こえるように言う。

「ねえ、この子も男の子？」

「うん。そうだよ。ってか、見た目で分かるだろ？」

「いや、だって、ムネが小さいって事も……」

すずの言葉に反応したのか、あやねが行き成り叫び出す。

「だーれが、小さいだあつ！！」

ビクツと行人は驚くが、すずは驚くどころか、

「あ、あやね。居たんだ」

追い打ちをかけた。

「さつきから居たわよ！！」

「じゅんじゅん」

(今のうちに……)

そおくと晴人はこの場から立ち去ろうとするが、

「ちょっと、どこ行くのよ!？」

「……………」

ダツと晴人は走る。

「ちよ、一体どんな体力してるのよ!？　　すず、あんたも捕まえるの手伝って!!！」

「捕まえるつて、そりゃ〜逃げたくなるよ」

行人がそう呟くが、全員聞く耳がないのか、

「すず、豆大福あげるから手伝いなさい!!！」

「そんな簡単に買収かいしゅうされるはず「分かった!」つて、簡単に買収かいしゅうされてるし!！」

「それじゃ、あやね、行くよ!！」

言いながらすずはあやねの身体を掴み、

「行っけええええええええええ」

思いつきり投げ飛ばした。

「のわあああああああ」

「っへ?」

ゴンツと振り返った晴人にあやねが勢い良くぶつかつた。

第一話 ながされて藍蘭島 (終) (後書き)

読んでくれた方ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5315p/>

侍と行人のながされて藍蘭島

2011年1月5日14時10分発行